

みゆき駅 落とし物係

高田 智子

「次はみゆき駅、みゆき駅、終点です」

車掌さんの声で、ゆみは目を覚ましました。

日曜の昼下がりに、ひとりピアノのレッスンをでかけた帰りのことです。ふと前の座席をみると、茶色いケースが置いてあります。まわりに人はいません。それは日ざしをあびて居眠りしているうさぎのようでした。

(きつとだれかの忘れものだ)

ゆみはとっさにケースを抱えると、電車を飛び降りました。改札で駅員さんにそのことを話すと、駅員さんは言いました。

「そこに落とし物係があるから、持って行くてくれるかな」

「これはバイオリンだね」

受け取った係の人は言いました。じっさい、係の人がふたを開けると、つやつやと光る楽器が顔をのぞかせました。まだ新品のようです。

「すみません、それ、わたしのです。」

そこへ息を切らせて、女の子がかけこんできました。ゆみと同じ年くらいの、髪をおさげにした女の子です。

「さっき、電車のなかに忘れたんです」

バイオリンに手を伸ばしかけた女の子に、係の人は聞きました。

「あなたのお名前は？」

「上野かなです」

「こまったなあ」

係の人はバイオリンとケースを確かめながら言いました。

「どこにも名前が書いてないや」

となりで見ていたゆみは、いらいらしてきました。まるでいじわるを言っているようです。すると、係の人は言いました。

「うたがっているわけではないよ。ただ、これが本当にあなたのものだとは分らないと返すことはできないんだ。そういう人がたまにいるんだよ。おさいふを落としてもいないのに、落としたとうそをついて、ここにやっ

くる人が」

そのとき、ゆみはいいことを思いつきました。

「ここでバイオリンを弾いてもらったらどうですか。もし弾けたら、これは彼女のものです」

かなでは、バイオリンをケースから取り出し、弓を慣れた手つきで構えました。それは彼女のからだの一部のようになじんでいました。かなではひとつ深呼吸をすると、すべりだすように演奏を始めました。軽やかなメロディーです。さっきまでしかめつらだった係の人も、曲に合わせて肩を揺らせています。曲が終わる頃には、バイオリンの持ち主は、かなでこそふさわしいと、みんなが思いました。

あれから十年たちました。みゆき駅のピアノで、ゆみの伴奏に合わせて、かなではバイオリンを弾いています。